

佐伯時代の独歩の手紙 (下)

山内武麟

(賛助会員・佐伯市城下東町)

三月十日附の大久保余所五郎宛の手紙には、大久保が近日中に郷里に帰ると聞いて、また自分は自分と同じように田舎暮らしになる。これも浮世のめぐり合せでよいこともあろうと、なぐさめている。

そして次にわが国の政界を論じ、今日の日本は革命の火で改めねばならぬ。それでなければ断じて偉大で先進する国民になれないと叫んでいる。

四月六日付けの中桐確太郎宛の手紙には、中桐が近頃何かで心を悩ましていると聞いて心配してなぐさめている。

次に自分の最近の心情について書いてある。

自分は毎日瞑想し感想している。欺かざるの記も三巻となり四冊目を書いている。自分は少しずつ進歩してい

る。いつかは人として真の人に達することが出来ると信じている。

自分は今美妙ということを感じ考えることが出来る。「嗚呼美妙！ 余は爾の宗教を信ずる也」と書いてある。今は自由であり、幸福であり、平和である。大いにやろうと意気に燃えている。そして世の中には薄志弱行で自分だけ高ぶっているものや、頑迷のわからずやが多いと慨いている。

そして次には去る三日に学生七、八名を連れて黒沢へ桜見に行ったことを報せてある。

先ず初めにその際に作った歌を、出放題のこしおれ左の如し御一笑を乞ふ、とその歌を書いてある。

驚のなくなる方をふりさけば

木の間がくれに花の散りゆく

桜花名もなき山に咲きいでて

ゆかしさまさる鶯のこゑ

菊の屋の見こしに山の花さきて

春日のどかに翁眠れり

黒沢の桜已に散り居たれば

散りにけり いざこと問はん村人よ

花のさかりを如何にながめし

と、そして黒沢の桜は老桜で二本だけ、幾百年位過ぎたかわからないこと、その処から少し離れた草むらに古く角の砕けた古墳があるのを見て、この古墳と桜とはどちらが古いかと学生に尋ねたことなどを記してある。

『歴史研究法』を君が送って来ないので、先日広島に立寄った時買い求めて読んだ。中々高尚で斬新であるが中々むづかしい。よく熟読することにする、と報らせてある。

四月十八日に田村三治に出した手紙には、当地の教会について次のように報じてある。

当地の教会は八九名の青年一週に四回会合致し、兎も角活気あり熱心あり、小生これ丈けが楽みに候、今

夜は水曜日ゆへ八時半より祈禱会これある筈に候、小生は毎時感話致す様務め居候、植村君の噂は毎度話柄に上り候、其度毎に諸氏来遊を望む事甚だ切なれども小生は只だとても出来ぬ話ならんとなだめ居候と、その様子を報せて

当地も四、五日前から好天気つゞきで暑くなり後の山で蟬の声を聞くようになった。海水浴の時節が近づいた。これが楽しみで指おり数えて夏八月の来るのを待っている。夏には帰国する。多分秋には再会出来るものと思っている。と報せてある。独歩は大の海水浴好きであった。四月からそれを楽しみにして待っていたのである。

五月七日に田村三治に手紙を出している。

これは田村に頼んであった『エマルソン』（十二文豪の一冊）を送って来て呉れた礼と、自分が熊本で友達と一しよに撮った写真を送ったことを報らせてある。

また田村から云って来た舟遊びについて、自分を羨ませて君は罪な人だ。君の友達の姉妹とかと一しよにボートに乗って隅田川にうかべ、はげしい波をしのいで漕ぎ、堤の上から見物人の手に汗を握らせたとは嘸かし大得意

であつたであろう。と冷かしている。

五月十六日に中桐確太郎に出した手紙には先ず自分の近況について報らせてある。

小生甚だ遅々として牛の歩むが如しと雖も而も日々進歩しつゝあると感じ居候、光明更らに光明、是れ小生の金言也 否運命也実に希望なり。此秋は上京致す積りに御座候 鶴谷学館も此夏かぎりにて閉校寧ろ廢校致す事と存じ候 故に小生教師の務めは是非とし此七月限り也

と、ある。鶴谷学校の紛糾は益々大きくなり、閉校、廢校の噂が乱れ飛んでいたのである。

夏には国元の山や海で身心の健康を恢復し、秋になったら収二と共にまたお目にかゝることが出来るだろう。と書いて俳句を一句添えてある。

友なくば何が都の秋の月

学校の紛争は己におさまっている。今は八九名の青年が小生を愛し、信じ、小生もまた心を尽して職に当り幸福だから安心あれ、と安心させ、先々々の日曜日山に登り(第二回目の元越登山)、先々は溪谷を探り(第二

回の銚子淵探勝)、先の日曜は舟遊びをした。おかしいことにはいつもわれら兄弟が案内役を務めることである。と報らせてある。

この頃、この中桐は民友社に勤め家庭叢書の編集に當っていた。

それで独歩は、自分もこの秋に上京したら先ず何よりも職を求めねばならない。徳富氏に當ってみる考えだから君も仲立ちをしてくれと頼み、民友社に入社出来たら幸せであるが出来ない時は他の方法を探さなければならぬ。しかし、もう二度と田舎には行かない。田舎ほど馬鹿者とわからずやが多い。と田舎をけなしている。

また五月二十七日にもこの中桐に手紙を出しているが、これは『哲学史』を送ってもらった礼とその読後感を簡単に書いてある。

六月二十三日には、田村と中桐に東京大地震の見舞状を端書で出している。

この地震は、安政の大地震以来の大地震と云われ、人畜に相当の死傷があつた。

六月二十七日は大久保に手紙を出している。

ど無沙汰したことを詫びて、夏の炎天は自分の最も得意な時で毎日海水浴を楽しんでいる。夏雲が奇峯を吐くなど自然の美も夏は格別美しく見える。と書いて、この秋には上京する。貴兄も上京するであろう。自分は上京しても別に策はないが徳富氏に頼んである。民友社に入社出来たらこの上ないと考えている。そして、雇われて百円もらって千人の生徒を教えるよりも、独立して三人の子供にいろはを教える方が余程面白い。

と、書いてある。鶴谷学館の紛糾には余程業を煮やしているかゞわかる。そしてその上に、

田舎は馬鹿の集合なり、自然の美必ずしも人心の美と一致せず、田舎の奴は却て交際がむづかしいもの候、御互の交はりの如き自由にして面白く、真実にして愉快なる如きは田舎に居ては到底望まれぬ事に候、此の如き事を思へば一日も早く東京にゆきたくなる也

と、佐伯のことをけなし、大いに憤慨している。

七月十五日には中桐に手紙を認めてある。

小生が大好きな夏は今が将に絶頂で、毎日海水浴をして面白い日を送っていると報らせ、しかし自分の心の不愉快は少しも治まらない。カーライルやワーズワースやテニソンをかじり読みしてなぐさめている。語るほどの友も生々とした人間もない。と嘆いて、

「今井君に与う書」という題で三十枚ほど書いたが、君に見せるようなものではない。

この作は、独歩の「苦悶の叫び」の下書みたいなものである。

次に、今度自分と一緒に上京する青年が佐伯に三人か四人か居る。みなクリスチャンである。実に気の毒な者もいる。自分は出来るだけこの者達の面倒を見てやる積りである。と、報らせてある。

以上、独歩が佐伯在住の間に友達に出した手紙を簡単に解説してみた。手紙の内容で書き残した処も多いが、これによって幾分なりとも、佐伯に居た頃の独歩の生活ぶりやその思想感情を推測されると思う。

(おわり)